ある看護科教員のアタマの中

5

～教員に転職してみた～

山岸 若菜

はじめに

この4月から10年以上勤めた訪問看護の仕事を辞めて、大学の看護科教員に転職しました。

「なんで？」とよく聞かれますが「やってみたかったから」です。

やってみたいことは何でもやってみる。それで失敗したと思えば辞めればいだけと思っています。

働こうと思えばどこでもいつでも求人があるのが看護師の強みです。

我ながら考えが軽い！

今回は転職ホヤホヤの現状を書いていきたいと思います。

異文化に飛び込んだ

教員として働き始めて4ヶ月が過ぎましたが、まだ全然慣れません。

看護の教員の働き方はブラックだと聞いていましたが、確かにそうかも。

特に看護科には実習が不可欠なので、それが働き方をしんどくさせているのかなと感じています。

看護は母性、小児、成人、老年、精神とざっくり領域が分かれています。

私は精神の領域を担当しているので、実習も精神科の実習についていくという感じです。

精神科の実習は学生も4年間の中で一度行くぐらいですが、成人は基礎だの急性期だの慢性期だのとその中でも分野が色々あるので、その担当の先生方は大変そうです。

だいぶ実習の量は減ったとのことですが、いつでもどこかの学年が実習に行っている状態なので、いったい自分は今年生の何の実習に行ってるのかわからなくなると話していました。

実習先に行って実習指導をして学校で授業をして学校運営の仕事もあって、そのうえ研究もつて。

そんな無理やん？と思います。

あと、お偉い人のしゃべり方や服装が独特。

割とレトロで昭和テイストの服装の方が多く、属性によって服装って固まるよな～としみじみ感じています。

でもちょっと楽しいと思えてきた

そんな感じで4月に入職してわけのわからないまま5月から実習が始まり、先生らしい服装も抵抗があり早速辞めたくなくて居ましたが、少し面白いと感じることも見つかってきました。

学校ではパッチリした目の大きな子やな～と思っていた学生が実習用のナチュラルメイクになるとつぶらな瞳だったり。

盛りすぎやん。

血圧測定の演習では血管が見つけられず「上腕動脈が行方不明で～す。」という学生がいたり。

死んでるやん。

学生が実習に行く前は「精神科ってめっちゃ怖そう」と言っていたのが「患者さんみんな普通の人やし、何なら優しいかも」に変わったり。

素直で最高やん。

この学生さんたちがどんな風に看護師っぽくなっていくのか見届けたいなと思えてきました。

いまだに続いていた悪しき習慣

そんな学生さんたちと実習に行っていると「まだやってんのかいな。」と思う看護界の悪しき習慣の話を知ることがあります。

それが実習先の指導者である先輩看護師からの理不尽な対応です。

この看護学生のあるあるは動画配信でも人気で、看護学生といえば『実習が怖い』と認識されつつあるようです。

どんな対応かというと、まず、無駄に怖い。

忙しいオーラを全開にして、話しかけずらくし、話しかけてもニコリともせず不愛想に返事をします。

そして学生は挨拶しても無視されるのが当たり前なところもあります。

確かに病棟はめちゃくちゃ忙しいし、愛想良くしてほしいとまでは思いませんけど、せめて挨拶ぐらいは返そうよと思います。

そういう対応でこの病院に勤めるのはイヤだってなったら、結局自分たちの首を締めることになるのね。

精神科の実習ではそんな対応をされることはないのですが、いつも学生さんたちは感激しています。

「挨拶したら返してくれはったんですよ。」

「自分がしゃべってる時手を止めて聞いてくれました。」

当たり前なんやけどな～。

とりあえず一緒に実習に行った学生たちには、「自分がやられて嫌だったことは、働き出したらやめよう。やってもらって嬉しかったことだけ自分より後の人にやっ払いこ」と話しています。

「絶対そうする！」と今は返事してくれますが、そのままの気持ちでいてくれよと願っています。

こんな感じでまだまだツッコめることは少ないですが、これからいっぱい見つけていきます！